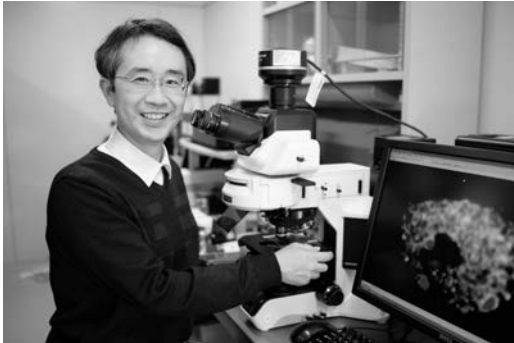


## 日本メンデル協会会長就任のご挨拶

第9代会長 松永幸大 (東京大学)



蛍光顕微鏡で実験中の松永会長

このたび、日本メンデル協会第9代会長を拝命いたしました松永幸大です。41年の歴史をもつ学術団体の舵取りを担うこととなり、身の引き締まる思いとともに、諸先輩方が築いてこられた学術基盤の重みを改めて実感しております。微力ではございますが、協会のさらなる発展のため尽力して参る所存です。会員の皆様には、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## ■私とメンデル協会・CYTOLOGIAとの出会い

私が本協会に初めて触れたのは、東京大学大学院理学系研究科で博士課程に在籍していた1993年のことでした。当時、指導教員でありCYTOLOGIA編集長でもあった黒岩常祥先生に、私が入り組んでいたヒロハノマンテマ *Silene latifolia* の性染色体解析の成果を「CYTOLOGIAに投稿してみてもどうか」と勧めていただいたことがきっかけでした。

同研究は、黒岩先生が開発された顕微測光装置を用いて、植物の性染色体を解析した成果であり、特にX染色体とY染色体のゲノムサイズ比が1.5であることを示した点は、後年のゲノム科学の進展を先取りするものでした (Matsunaga et al., *Cytologia* 1994)。2025年2月、ヒロハノマンテマの全ゲノム配列が国際的に報告され、そこで示されたX/Y比も1.5であっ

たと知り、30年前の細胞遺伝学的推定が最新ゲノム技術によって改めて裏付けられたことに深い感慨を覚えました。この経験は、黒岩先生がかつて出芽酵母の染色体サイズを顕微測光で推定し、後に全ゲノム配列とほぼ一致したとして大いに喜ばれていた姿に重なります。細胞遺伝学的アプローチが、長い時間を経て揺るぎない価値を示すことを、私自身の研究人生で実感した瞬間でした。

## ■いまこそ求められる細胞遺伝学の意義

近年、生物学の研究手法は飛躍的に高度化し、ゲノム解析・シングルセル解析・AI解析など、技術革新は日進月歩で進んでおります。しかしその一方で、地球上の多様な生物のうち記載されている生物種は一部にすぎないという厳しい現実があります。国際自然保護連合 (IUCN) などの報告によれば、毎年約4万種、1日あたり100種以上が絶滅していると推定されています。これらの種がどのような細胞構造や遺伝学的特徴を持っていたのか、多くは記録のないまま消えていきます。社会性昆虫の研究者エドワード・O・ウィルソンは、“Describe it before it blows away.” (「それが吹き飛んでしまう前に、記載せよ」) と述べ、生物の記載と基礎生物学研究の継続的な重要性を強調しました。メンデル協会が刊行するCYTOLOGIAは、微小藻類や微生物の細胞形態学的解析、動植物やヒトなどの核型解析、さらには染色体異常や細胞・オルガネラ分裂様式の研究など、多様な生物の細胞遺伝学的解析結果の論文に重心を置く国際誌として、歴代編集長のご尽力のもと独自の地位を築いてきました。特に、一般的な研究潮流から離れた“埋もれたテーマ”であっても、将来の生命科学へ確かな土台を提供しうることを信じ、その価値を丁寧に伝えてきた日本メンデル協会の伝統は、今日のAI・ゲノム科学の時代にむしろ輝きを増していると感じております。

## ■メンデルの精神とAI時代の学術研究

私たちの協会の名前の由来でありますグレゴール・

ヨハン・メンデルも、自身の研究成果「遺伝の法則」が評価されるまで約35年間を要しました。しかし、彼が残した明快な実験記録と普遍的な洞察は、その後の遺伝学・分子生物学の基盤を形成する礎となりました。現代、生成AIを含む人工知能技術は、たとえ小さな研究報告であっても、その知識を即座に全世界に共有し、次の研究の糧とする力を持っています。すなわち、「記載すること」こそが、AI時代において最大の価値創出行為の一つになっていると言っても過言ではありません。日本メンデル協会は、生物多様性に根ざした細胞遺伝学・細胞生物学の研究成果を国際的に発信し、将来の生命科学の基盤を創り出す“知のアーカイブ”としての役割を果たしていきます。

#### ■会員とともに創る次の40年へ

本協会は、1984年の設立以来、多くの先達によっ

て支えられてきました。1990年以降はCYTOLOGIAの刊行母体として国際的学術コミュニティに貢献し、2013年には公益法人として新たな段階へと移行しました。これからの40年は、多様な研究領域をつなぐ学際性、AIと生物科学の融合、国際共同研究の拡充が鍵になります。私自身、細胞遺伝学を原点としながら、異種ゲノム融合やゲノム水平伝播など、従来の枠組みを超える研究を行ってきました。その経験を活かし、本協会が次世代研究者の挑戦を後押しし、将来に向けた学術的・社会的価値を創出できる組織となるよう尽力してまいります。

会員の皆様のご協力を賜りながら、日本メンデル協会のさらなる発展に向けて邁進する所存です。引き続き皆様の温かいご指導、ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

---

## 日本メンデル協会第2回大会の報告

風間裕介（大会長）



日本メンデル協会第2回大会が2025年6月14日（土）～15日（日）に福井商工会議所にて開催され、全国から77名の参加者が集まりました。初日の6月14日には、総会のほか、キトロギア奨励賞の授賞式と受賞講演、招待講演、特別招待講演が行われました。今年度のキトロギア奨励賞は、藤原崇之会員（国立遺伝学研究所）、平野智也会員（宮崎大学）の2名が受賞し、それぞれ受賞講演を行いました。また、2021年度受賞者である坂本勇貴会員（信州大学）も受賞講演を行いました。招待講演では、伊藤崇志会員

（福井県立大学）と田中厚子会員（琉球大学）が登壇しました。特別招待講演では、柏山祐一郎氏（福井工業大学）、野澤昌文氏（東京都立大学）、黒岩麻里氏（北海道大学）がそれぞれ講演を行いました。原生物から藻類、植物、動物に至るまで、幅広い生命現象を対象にした研究発表を聞くことができたのは、メンデル協会大会ならではの特色であり、登壇者の皆さんがわかりやすく発表してくださったおかげで、非常に中身の濃い講演会となりました。



風間大会長



優秀発表賞受賞者と風間大会長



大会参加者集合写真

情報交換会は、亀の井ホテルに場所を移して開催されました。河野会長の乾杯の挨拶で始まり、学生会員からシニアの研究者まで幅広い世代の会員が、福井の新鮮な魚介類や地酒を囲んで交流し、ディスカッションを通じて親交を深めることができました。

2日目には37演題のポスター発表が行われました。初日の熱気を引き継ぎ、どのポスターの前でも活発な議論が展開されました。一般会員による投票の結果、学生会員による優れた発表として、石田萌音会員（東京大学）、小玉智恵会員（東京大学）、小林壮生会員（福井県立大学）、福村薫会員（東京大学）の4名が優秀発表賞を受賞しました。午後には永平寺や恐竜博物

館を巡るエクスカージョンも催され、33名の方が参加する賑やかな企画になりました。

今大会では、第1回大会大会長の永田典子会員と、福井県出身の佐々木成江会員に実行委員長を務めていただきました。昨年度大会の経験を活かしつつ地方開催ならではの温かいもてなしを提供することができましたこと、両氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。来年度の大会は、6月中旬に東京大学柏キャンパスにおいて開催される予定で、松永幸大会長が大会長を務められます。会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

# 日本メンデル協会第2回大会プログラム

期日：2025年6月14日（土）～15日（日）

会場：福井商工会議所 会議室



## 特別招待講演

- 「遺伝子から考える盗葉緑体性鞭毛虫ラパザの進化」  
柏山祐一郎（福井工業大学）
- 「ショウジョウバエにおける多様な性染色体の進化」  
野澤昌文（東京都立大学）
- 「Y染色体をもたない哺乳類の性決定と性染色体の進化」  
黒岩麻里（北海道大学）

## 一般招待講演

- 「タウリンの肝臓における抗細胞老化作用の検討」  
伊藤崇志（福井県立大学）
- 「オキナワモズクの形態形成—三次元構造の組織化と分化転換—」  
田中厚子（琉球大学）

## 奨励賞受賞講演

- 「シロイヌナズナにおける核ラミナタンパク質CRWNsの解析」  
坂本勇貴（信州大学）
- 「重イオンビーム照射花粉を用いた雄性配偶子のDNA損傷応答解析」  
平野智也（宮崎大学）
- 「温泉紅藻シアニジウム類における実験技術開発と今後の展開」  
藤原崇之（国立遺伝学研究所）

## ポスター発表

- P-01 (優秀発表賞) 動物培養細胞の食作用を利用したシアノバクテリアの取り込み・維持プロセスの細胞内動態研究  
○石田萌音<sup>1</sup>, 小玉智恵<sup>1</sup>, 乾弥生<sup>1</sup>, 仮屋園遼<sup>2</sup>, 松永朋子<sup>1</sup>, 小山内崇<sup>2</sup>, 丸山真一朗<sup>1</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域, <sup>2</sup>明治大・農
- P-02 動植物ハイブリッド細胞における外来DNAの核内移行のライブセルイメージング解析  
○上原彩水<sup>1</sup>, 青木遼太<sup>1</sup>, 渋谷晴輝<sup>1</sup>, 松永朋子<sup>1</sup>, 乾弥生<sup>1</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域
- P-03 (優秀発表賞) 動物培養細胞の貪食能向上法の開発による細胞内共生成立メカニズムの解明  
○小玉智恵<sup>1</sup>, 乾弥生<sup>1</sup>, 丸山真一朗<sup>1</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域
- P-04 タウリンの肝臓における抗細胞老化作用の検討  
○伊藤崇志<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・生物資源
- P-05 (優秀発表賞) 倍数体ヒロハノマンテマを用いたX染色体の性決定能の解析  
○小林壮生<sup>1</sup>, 落合詩月<sup>1</sup>, 風間裕介<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源
- P-06 より生きている状態の微細構造観察を求めて：サンドイッチ凍結技法を用いた電子顕微鏡的研究  
○山口正視<sup>1</sup>, 高橋梓<sup>1</sup>, 知花博治<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>千葉大・真菌医学研究センター
- P-07 微細藻類の細胞外プロテオーム解析による細胞間相互作用の探索と分泌タンパク質の多様性

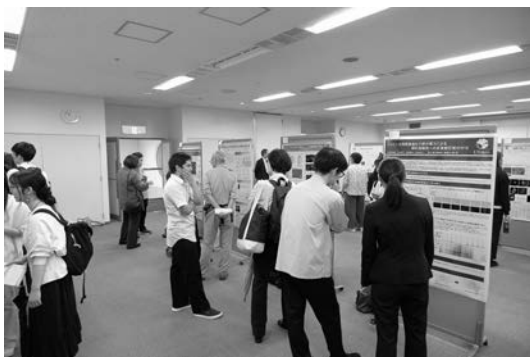


河野前会長と松永現会長

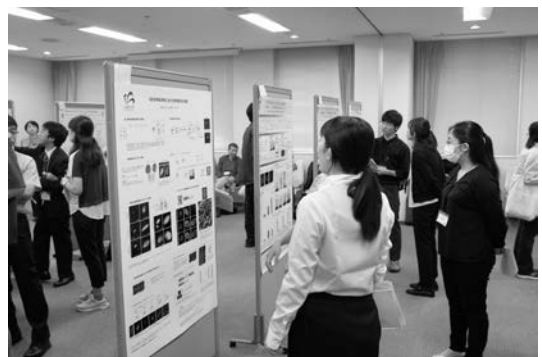


招待講演での質疑応答

- アペディンシヤプニルイシラク<sup>1</sup>, 乾弥生<sup>1</sup>, 松林嘉克<sup>2</sup>, 丸山真一郎<sup>1</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域, <sup>2</sup>名大・院・理
- P-08 重イオンビームで作出したシロイヌナズナ倍数化変異体の遺伝様式  
 ○兵渡友誉<sup>1</sup>, 鶴飼優葉<sup>1</sup>, 阿部知子<sup>1</sup>, 風間裕介<sup>1,2</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源, <sup>2</sup>理研・仁科センター
- P-09 緑化時における酸性膜脂質変異体の色素体解析  
 ○上床理紗<sup>1</sup>, 吉原晶子<sup>2</sup>, 小林啓子<sup>1</sup>, 高橋綾子<sup>1</sup>, 大崎有美<sup>1</sup>, 小林康一<sup>2</sup>, 永田典子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>日本女子大・院・理, <sup>2</sup>大阪公大・院・理
- P-10 ゼラニウム卵細胞の巨大ミトコンドリアにおける膜構造解析  
 ○津田安咲子<sup>1</sup>, 高橋綾子<sup>2</sup>, 黒岩晴子<sup>2</sup>, 黒岩常祥<sup>2</sup>, 永田典子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>日本女子大・院・理, <sup>2</sup>日本女子大・理
- P-11 イチョウの早生種と晩生種のRNAseq解析  
 山下博史<sup>1</sup>, 澁谷龍弥<sup>2</sup>, 呂虹橋<sup>3</sup>, 内田美重<sup>3,4</sup>, 小林正美<sup>2</sup>, 景山伯春<sup>4</sup>, 井上和仁<sup>5,6</sup>, ○内田英伸<sup>3,6</sup>  
<sup>1</sup>京都府大・環境理, <sup>2</sup>筑波大・物質工学科, <sup>3</sup>名古屋文理大・フードビジネス, <sup>4</sup>名城大・院総合学術, <sup>5</sup>神奈川大・化学生命, <sup>6</sup>神奈川大・総理研
- P-12 *Abelmoschus manihot*—越前和紙用系統と観賞用系統の比較  
 ○高橋望花<sup>1</sup>, 大関澄花<sup>1</sup>, 小嶋美紀子<sup>2</sup>, 竹林裕美子<sup>2</sup>, 榎原均<sup>2</sup>, 嶋田千香<sup>3</sup>, 片野肇<sup>1</sup>, 池田美穂<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・生物, <sup>2</sup>理研・環境資源, <sup>3</sup>福井大・学術研究院
- P-13 コムギ祖先種 *Aegilops tauschii* の芒の長さを決める遺伝子のマッピング  
 ○井元洸志<sup>1</sup>, 西嶋遼<sup>1</sup>
- <sup>1</sup>福井県大・生物
- P-14 間接免疫蛍光染色法を用いたシロイヌナズナ染色体部分重複変異体のエピゲノム解析  
 ○鶴飼優葉<sup>1</sup>, 西嶋遼<sup>1</sup>, Jeffrey Fawcett<sup>2</sup>, 坂本卓也<sup>3</sup>, 生駒拓也<sup>1</sup>, 杉田和陽<sup>1</sup>, 兵渡友誉<sup>1</sup>, 乾弥生<sup>4</sup>, 田中裕之<sup>5</sup>, 伊藤武彦<sup>5</sup>, 阿部知子<sup>6</sup>, 松永幸大<sup>4</sup>, 風間裕介<sup>1,6</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源, <sup>2</sup>リージョナルフィッシュ, <sup>3</sup>神奈川大・理, <sup>4</sup>東京大・院・新領域, <sup>5</sup>東京科学大・生命理工, <sup>6</sup>理研・仁科センター
- P-15 無融合種子生殖種における倍数性と減数分裂過程の細胞遺伝学的解析  
 ○佐藤杏子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>富山大・学術・理
- P-16 トレニアにおける OPR3 ホモログ欠損変異体の解析  
 ○黛隆宏<sup>1</sup>, 森住匠翔<sup>1</sup>, 池田美穂<sup>1</sup>, 松永幸大<sup>2</sup>, 風間裕介<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源, <sup>2</sup>東京大・院・新領域
- P-17 Ca<sup>2+</sup>が植物のDNA二本鎖切断修復に与える影響  
 ○江守祐汰郎<sup>1</sup>, Alvin Sanjaya<sup>1</sup>, 坂口実夢<sup>1</sup>, 高城啓一<sup>2</sup>, 風間裕介<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源, <sup>2</sup>若エネ研・生物資源
- P-18 シリンジ法による難性質転換植物への簡便な遺伝子導入  
 ○五十嵐由依<sup>1</sup>, 杉本愛華<sup>1</sup>, 小林壮生<sup>1</sup>, 乾弥生<sup>2</sup>, 工藤洋<sup>3</sup>, 山本将之<sup>4</sup>, 松永幸大<sup>2</sup>, 風間裕介<sup>1</sup>, 池田美穂<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・生物資源, <sup>2</sup>東大・院・新領域, <sup>3</sup>京大・生態研, <sup>4</sup>富山大・院・理工
- P-19 トレニアの蜜嚢欠損変異体を用いた訪花昆虫飛来頻度の測定  
 ○小川馨乃子<sup>1</sup>, 黛隆宏<sup>1</sup>, 小越咲子<sup>2</sup>, 篠山治



ポスター発表 その1



ポスター発表 その2

- 恵<sup>1</sup>, 畑下昌範<sup>3</sup>, 高城啓一<sup>3</sup>, 阿部知子<sup>4</sup>, 風間裕介<sup>1,4</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源, <sup>2</sup>福井高専・電子情報工, <sup>3</sup>若エネ研・生物資源, <sup>4</sup>理研・仁科センター
- P-20 ミズゴケ属2種のゲノムサイズおよび細胞遺伝学的比較研究  
 ○加藤木高広<sup>1</sup>, 高山晴夫<sup>2</sup>, 星良和<sup>3</sup>  
<sup>1</sup>東海大・総農研, <sup>2</sup>鹿島・技研, <sup>3</sup>東海大・農学
- P-21 藻類-動物培養細胞ハイブリッド細胞株の長期継代における染色体動態解析  
 ○箕浦夕紀<sup>1</sup>, 松永朋子<sup>1</sup>, 青木遼太<sup>1</sup>, 数藤由美子<sup>2</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東京大・院・新領域, <sup>2</sup>量研機構・放医研
- P-22 花粉管伸長過程における新規転写の役割  
 ○澁田未央<sup>1</sup>, 小松愛那<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>山形大・理
- P-23 ナガバノモウセンゴケとその起源となる両親種の二列状トライコームの細胞形態と密度の違いについて  
 ○船越さゆり<sup>1</sup>, 小祿瞬太<sup>2</sup>, 星良和<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>東海大・院・農, <sup>2</sup>東海大・農
- P-24 イトバモウセンゴケの染色体上に存在するATリッチ領域は減数分裂において局在型の動原体として機能する  
 ○寺崎景吾<sup>1</sup>, 星良和<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>東海大・院・農, <sup>2</sup>東海大・農
- P-25 緑藻およびトレボクシア藻の従属栄養培養能とGABAやオルニチンなどのアミノ酸類の誘導  
 ○竹下毅<sup>1,2</sup>, 恵良田真由美<sup>2</sup>, 越智奈津子<sup>2</sup>, 白田祥子<sup>2</sup>, 田口裕基<sup>2</sup>, 河野重行<sup>2</sup>  
<sup>1</sup>京都大・院・人間環境, <sup>2</sup>東京大・院・新領域
- P-26 エンバクの重イオンビーム変異体集団の作出  
 ○遠藤柁平<sup>1</sup>, 畑下昌範<sup>2</sup>, 高城啓一<sup>2</sup>, 西嶋遼<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>福井県大・院・生物資源, <sup>2</sup>若エネ研・生物資源
- P-27 孔辺細胞および敷石細胞におけるK<sup>+</sup>イオン分布解析と膜交通因子PATROL1と表層微小管の共局在解析  
 ○安達萌華<sup>1</sup>, 祢宜淳太郎<sup>2</sup>, 射場厚<sup>2</sup>, 檜垣匠<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>熊本大・院・自然科学, <sup>2</sup>九州大・院・理
- P-28 気孔運動制御因子PATROL1の塩ストレス下における局在と機能の解析  
 ○岡松真白<sup>1</sup>, 射場厚<sup>2</sup>, 祢宜淳太郎<sup>2</sup>, 檜垣匠<sup>1</sup>
- <sup>1</sup>熊本大・院・自然科学, <sup>2</sup>九州大・院・理
- P-29 オキナワモズクの形態形成—三次元構造の組織化と分化転換—  
 稲福菜実子<sup>1</sup>, 佐藤陽一<sup>2</sup>, ○田中厚子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>琉大・院・理工学, <sup>2</sup>理研食品
- P-30 クロレラ (*Parachlorella kessleri*) の内部倍数性と重イオンビーム照射による染色体断片化  
 ○石井公太郎<sup>1,2</sup>, 浅野円花<sup>3</sup>, 風間裕介<sup>1,4</sup>, 竹下毅<sup>3</sup>, Katerina Bisova<sup>5</sup>, 河野重行<sup>3,6</sup>, 阿部知子<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>理研・仁科センター, <sup>2</sup>量研・放医研, <sup>3</sup>東京大・院・新領域, <sup>4</sup>福井県大・生物資源, <sup>5</sup>IMIC・ALGATECH, <sup>6</sup>東京大・新領域・ライフサイエンス
- P-31 画像情報の低次元化に基づくBY-2細胞に生物活性を示す化合物の探索  
 ○内田絢香<sup>1</sup>, 寺田みのり<sup>2</sup>, 檜垣匠<sup>1,2</sup>  
<sup>1</sup>熊本大・院・自然科学, <sup>2</sup>熊本大・理
- P-32 微細藻類を取り込んだ動物培養細胞で生じる細胞障害の解析  
 小島龍弥<sup>1</sup>, ○松永朋子<sup>1</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域, <sup>2</sup>新潟大・理
- P-33 (優秀発表賞) ネジバナの単一受精メカニズムを細胞周期から探る  
 ○福村薫<sup>1</sup>, 水上茜<sup>1,2</sup>, 東山哲也<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東京大・院・理, <sup>2</sup>愛知学院大・教養
- P-34 カルビン回路関連遺伝子群の導入による哺乳類細胞への炭素固定能の付与  
 ○新井美空<sup>1</sup>, 松永朋子<sup>1</sup>, 墨谷暢子<sup>2</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域, <sup>2</sup>新潟大・理
- P-35 先立つものは種苗生産—褐藻マコンブ初期成長の最適環境条件を探る—  
 ○佐藤陽一<sup>1</sup>, 保科美和<sup>1</sup>, 最上谷美穂<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>理研食品
- P-36 動物細胞におけるクロロフィル生合成経路確立の試み  
 ○小島龍弥<sup>1</sup>, 松永朋子<sup>1</sup>, 墨谷暢子<sup>2</sup>, 松永幸大<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>東大・院・新領域, <sup>2</sup>新潟大・理
- P-37 渦鞭毛藻の縦および横鞭毛のそれぞれに見られる二つの異なる運動とそれらの運動装置  
 ○丸山正<sup>1</sup>  
<sup>1</sup>北里大・海洋生命科学

# 日本メンデル協会第二回大会に参加して

石田 萌音 (東大・院・新領域)



今回、動物培養細胞の食作用を利用したシアノバクテリアの取り込み・維持プロセスの細胞内動態研究と題してポスター発表をさせていただき、優秀発表賞をいただきましたことを大変光栄に感じるとともに、評価・ディスカッションいただきました皆様に深く感謝いたします。今回は太古に生じた一次共生の再現系を構築することを目的とした研究内容を発表いたしました。これまでの研究を指導してくださった方々にも重ねてお礼申し上げます。

昨年の大会にも参加させていただきましたが、今年はいよいよ多くの方がポスター発表をされ、分野の枠にとらわれずに積極的なディスカッションがなされていたと感じました。特に先生方のみならず高校生をはじめとし、学生の方からも多くの提案をいただけたことが印象深い大会でした。私は学会に参加すると、未知の知識が多く行き交うため毎度息が詰まりそうになるほど必死に情報についていこうとする傾向があります。そのため「この情報を知っていないと恥ずかしいかもしれない」とヒヤヒヤする場面が多々あります。けれども、メンデル学会の会員の皆様はフレンドリーな方が多く、リラックスした状態でポスター発表・ディスカッションを行うことができました。

二日目のポスターセッションの後には、福井県の観光を通して会員同士の情報交換をおこなうエクスカージョンの企画がございました。昼食はほっきょ仕にて福井名物のソースカツ丼や生ごまどうふをいただき、永平寺の散策後、Eshikotoで日本酒などのお土産を選び、恐竜博物館の見学をしました。実は高校の修学旅行で福井県を訪れたことがあったようですが、すっかり忘れており永平寺の散策でその記憶を呼び戻すこ

とことができました。あいにくの小雨でしたが、厳かな永平寺は圧巻でした。恐竜博物館では道中に化石発掘体験場と書かれた看板があり、個人的に気になりましたので到着後すぐにそちらに向かいました。受付終了間際に受付していただき、無事に巻貝の化石も発掘できましたので本大会に参加した記念として保管しております。どうやら実際に化石採掘を行う現場の石を化石発掘体験場運び込んでいるようですので、珍しい化石を発掘した場合には恐竜博物館に発掘者の名前とともに展示されるようです。残念ながら今回は展示に至りませんでしたが、恐竜博物館を訪れる機会がございましたら化石発掘体験をお勧めいたします。

ポスター発表での意見交換では貴重なご意見を多数いただき、かつエクスカージョンではリフレッシュすることができました。大会を企画・運営いただき、このような機会に参加させていただけたことに深く感謝いたします。



永平寺入口



ほっきょ仕でのお食事



化石発掘体験で見つけた巻貝化石



「これまでの研究とこれから」

平野智也 宮崎大学

この度は、第11回CYTOLOGIA奨励賞という栄えある賞を賜り、大変光栄に存じます。選考にご尽力いただきました先生方ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

私は学生時代、植物遺伝資源の長期保存というテーマで研究を開始し、種子を扱うことが多かったため、重複受精や胚発達に関心を抱くようになりました。学位取得後に北海道大学の星野洋一郎先生の研究室にポスドク研究員としてお世話になり、重複受精に関わる研究に携わりました。特に花粉に関する研究に興味を惹かれ現在まで続けることとなりました。その後、理化学研究所の阿部知子先生のもとで重イオンビーム育種技術に関する研究に取り組みました。阿部先生の「研究室のテーマと並行して、自らの研究テーマを進める」という方針に後押しされ、花粉への重イオンビーム照射に挑戦したことが、今回の受賞につながるきっかけとなりました。

学生時代には、技術開発という側面が強い研究テーマに取り組み、独創的な研究(手法)というのはどのように構築したらよいのか悩むこともありましたが、これまでのポスドク生活、さらに現職の宮崎大学において研究の視野が広がり、新たな課題に挑むなかで、いつしか自らの研究テーマが形づくられたと実感しています。「興味を持ったテーマに積極的に挑戦する」という姿勢が私にはあっているようで、幅広い研究テーマを推進されていた大学時代の恩師・三位正洋先生のお姿に学んだものと感じています。人・環境に恵まれたということが私の最大の幸運であり、これまでご指導いただいた先生方、共に学んだ仲間たちに、改めて感謝申し上げます。

日本メンデル協会第二回大会にて受賞講演の機会を頂戴し、大会にも参加させていただきました。受賞講演をはじめ、招待講演および特別招待講演において幅広い分野のお話を拝聴し、大いに刺激を受けました。情報交換会やポスター発表でも活発な議論が交わされており、特に若手研究者にとって大変有意義な大会となっていたと感じました。次回は、我々の研究室の学生たちにも是非参加してもらいたいと考えています。

今回、このような素晴らしい賞をいただいたことを通じて、自らの研究を振り返る貴重な機会となりました。今後も新たな挑戦を続け、より一層研究に邁進し

てまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

研究と交流の場の重要性を再認識した第二回福井大会  
藤原崇之 国立遺伝学研究所

このたび、日本メンデル協会第2回大会(福井)において奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。これまでご指導くださった先生方、日々の研究を支えてくださった共同研究者の皆さまに、心より御礼申し上げます。また、本学会の開催・運営にご尽力くださった先生方、選考に携わってくださった委員の皆さま、そして推薦してくださった先生にも、あらためて深く感謝申し上げます。

今回の受賞対象となった研究は、温泉環境に生息する単細胞紅藻 *Cyanidioschyzon merolae* を、汎用的なモデル生物として活用するための実験技術の開発です。本種は、細胞構造およびゲノム構成がきわめて単純であり、真核生物の基本的な仕組みを解明するうえで理想的な材料です。この利便性をさらに高めることを目的として、これまでに遺伝子導入法の改良、誘導型遺伝子発現・デグロン系の構築など、実験技術の整備に取り組んでまいりました。こうした基盤整備により、*C. merolae* を含むシアニジウム類(Cyanidiphyceae)の実験系は大きく進展し、本系統が光合成真核生物における重要なモデル系として注目されるようになりました。近年では、生態学的役割の解明、さらには産業応用に向けた研究も進み、本研究で構築した技術基盤が、そうした展開に寄与できることを嬉しく感じております。

福井で開催された第二回大会(2025年6月14・15日)では、日頃なかなか触れる機会の少ない分野の講演を多数拝聴し、大いに刺激を受けました。研究対象も多岐にわたり、自身の専門とは異なる視点や着想に触れることで、あらためて研究の幅を見直す機会となりました。参加者数や会場の規模も程よく、活発な議論が自然と生まれる雰囲気があったことも印象深く感じています。とりわけ大学院生の皆さんにとっては、世代を超えた意見交換が行える貴重な場であったことと思います。また、研究者が世代を越えて同じ部屋に宿泊するという形式も、思わぬ学びや新たなつながりが生まれるよい機会となりました。さらに、エクスカッションでは福井の自然や歴史、文化に触れることがで



奨励賞受賞者と河野会長（当時）

き、教養的な学びの時間としても大変有意義でした。

今後も、いただいた賞に恥じぬよう、研究に誠実に取り組み、少しでも分野の発展に貢献していけるよう努めてまいります。このような貴重な機会をいただきましたことに、改めて心より感謝申し上げます。

---

#### 細胞核の魅力とメンデル協会大会の魅力

坂本勇貴 信州大学理学部

---

この度は、第7回CYTOLOGIA奨励賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。学部生時代から長きにわたってご指導くださいました高木慎吾先生、ポストドク時代に叱咤激励してくださった松永幸大先生、共同研究者の皆様、そして日々の研究を支えてくださった研究室関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

私は学部生時代から、植物細胞核の形態制御に関する研究に取り組んでまいりました。研究室に配属された当初、先輩に教わりながらシロイヌナズナの葉の表皮細胞を顕微鏡で観察した際、教科書に描かれている模式図とは全く異なる細胞核の形態を目にし、大きな衝撃を受けました。その後、指導教員であった高木さんに「細胞核の形態制御に関する研究がしたい」と申し上げたところ、高木さんの専門分野ではなかったにもかかわらず「ええんちゃう、やってみたらば」と快く背中を押してくださったことが、本研究を始める

きっかけとなりました。シロイヌナズナの細胞核には、球形のものもあれば紡錘形や棒状のものもあり、多様な形態が見られます。一方で、植物種によっては、ほとんどの細胞核が球形を示す種もあれば、多くが引き伸ばされた形態を示す種もあります。私は、このような植物における多様な核形態の制御メカニズムやその生物学的意義に魅了され、15年以上にわたり研究を続けてまいりました。今回の受賞を励みに、今後も細胞核研究に一層邁進してまいりたいと存じます。

2025年6月には、福井県で開催された日本メンデル協会第2回大会に参加いたしました。私は2021年に奨励賞を頂戴しましたが、当時はコロナ禍のため会員の皆様に直接お礼を申し上げる機会がありませんでした。そのため、本大会で受賞講演の機会を頂けたことを大変ありがたく思っております。本大会では、私を含め8名による講演が行われました。なかでも、特別招待講演として東京都立大学の野澤昌文先生と北海道大学の黒岩麻里先生によるショウジョウバエおよびトゲネズミを用いた性染色体の研究には深く引き込まれました。これらの研究は、私が所属している植物系の学会では触れる機会が少ない内容であり、本大会が扱う学問領域の広さとその魅力を改めて実感いたしました。最後に、本大会会長である福井県立大学の風間裕介先生をはじめ、運営にご尽力くださった大会関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

## 2025年 日本メンデル協会カレンダー

1月18日	メンデル講演会第1回 平野博之先生 於千葉市科学館
3月4日	第56回理事会
3月14日	第57回臨時理事会
3月21日	第26回評議員会
3月25日	CYTOLOGIA Vol.90-1号発刊
5月27日	第58回理事会
6月10日	第59回臨時理事会
6月14日	第27回評議員会
6月14日	日本メンデル協会第2回大会・総会 (第7・11回キトログア奨励賞受賞記念講演会) 於福井商工会議所会議室
6月14日	第60回臨時理事会
6月23日	登記完了 (役員改正の為)
6月27日	CYTOLOGIA Vol.90-2号発刊
7月5日	メンデル講演会第2回 山口正視先生 於千葉市科学館
9月30日	CYTOLOGIA Vol.90-3号発刊
11月1日	メンデル講演会第3回 河野重行前会長 於千葉市科学館
12月25日	CYTOLOGIA Vol.90-4号発刊予定

### 編集後記

日本メンデル協会通信の41号をお届けします。巻頭言は、第9代会長に就任された東京大学の松永先生に書いて頂きました。その後は前回に引き続き、日本メンデル協会大会の特集号となっています。また、当大会で受賞講演をされた3名の奨励賞受賞者の方からのメッセージも掲載しています。大会の熱気とメンデル協会の1年が伝われば幸いです。

私の所属する熊本大学（の元の、第五高等学校）に、現在の朝ドラ「ばけばけ」のモデルとなったラフカディオ・ハーンが、3年間に渡り外国人教師として在任していたことをご存知の方も多いかと思います。そろそろ熊本編も始まるのではないかと期待は高まるばかりです。熊大の敷地には、ハーン先生のレリーフと碑もあります（写真）。レリーフの後ろに見える五高記念館（<http://www.goko.kumamoto-u.ac.jp>）では、3月30日まで「企画展 五高教師 ラフカディオ・ハーン」が開催されています。お城近くの熊本博物館でも、2月15日まで「特別展 八雲とセツ 家族の物語」が行われています。街中では、小泉八雲熊本旧居を見学することもできます。熊本に来られる予定があれば、ぜひお立ち寄りください。

高野 博嘉



ハーン先生のレリーフ



ハーン先生の碑